

八尾市文化財調査報告23

八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅱ

1991.3

八尾市教育委員会



正誤表

	誤	正
P 18-L 5		ているといえるだろう。
P 22-L 5	矢作遺作は、	矢作遺跡は、

## はじめに

八尾市は生駒山地の麓から大阪平野にひろがっており、古代から人々の生活が営まれてきた土地であります。そのために市域の大半が埋蔵文化財包蔵地であり、地中に遺跡が眠っていると思われます。しかし、ここ数年近郊都市の再開発が進められており、八尾市もまた例外ではありません。平成2年度の届出件数は600件以上にも達しようとしています。特に、古来より「高安千塚」の名称で知られてきた高安古墳群がある高安山から国道171号線周辺にかけての山麓部では開発事業が増加しており、本概要報告書にもそれらに関連した調査が記載されております。その多くはこれらの開発事業に先立ち遺構の有無を確認するために行なわれたものでありますが、貴重な遺構・遺物が出土し、埋蔵文化財を保存することの困難さを痛感しております。本書が少しでも多くの方々の目にふれ、今後の埋蔵文化財の保存・活用の基礎資料として活用され、またより一層の埋蔵文化財に対する御理解をいただけるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、これらの調査にあたり多大な御協力と御理解を頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

## 例　　言

1. 本書は、平成2年度に八尾市教育委員会が公共事業等に伴って八尾市内各遺跡で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長　田中弘）が各事業主体に協力を求めて実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財室の米田敏幸、酒齋、吉田野乃が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、酒、吉田が執筆を分担し、共同で編集を行なった。

## 目 次

1. 田井中遺跡（90-29）の調査 .....	1
2. 郡川遺跡（90-105）の調査 .....	3
3. 福万寺遺跡・池島遺跡周辺（90-39）の遺構確認調査 .....	6
4. 恩智遺跡（90-10）の調査 .....	10
5. 萱振遺跡（90-287）の調査 .....	13
6. 久宝寺遺跡（90-11）の調査 .....	16
7. 矢作遺跡（90-302）の調査 .....	19
8. 矢作遺跡（90-72）の調査 .....	22
9. 矢作遺跡（90-201）の調査 .....	24
平成2年度公共事業関係調査一覧表 .....	27

## 図版目次

図版1 田井中遺跡 (90-29)	調査区全景北から
郡川遺跡 (90-105)	調査区全景
図版2 福万寺遺跡・池島遺跡 (90-39)	第1グリット
	第2グリット
図版3 恩智遺跡 (90-10)	炉状遺構掘削前
	炉状遺構掘削後
図版4 萱振遺跡 (90-287)	第1調査区西壁
	第2調査区西壁
図版5 萱振遺跡 (90-287)	第3調査区南壁
	第3調査区土器出土状況
図版6 久宝寺遺跡 (90-11)	南グリット
	北グリット
図版7 久宝寺遺跡 (90-11)	土器出土状況
	土器出土状況
図版8 矢作遺跡 (90-72)	調査区全景
矢作遺跡 (90-201)	NO3立孔全景
図版9 恩智遺跡 (90-10)	出土遺物
萱振遺跡 (90-287)	出土遺物
図版10 久宝寺遺跡 (90-11)	出土遺物
矢作遺跡 (90-302)	出土遺物

### 1. 田井中遺跡（90-29）の調査

調查地 空港一丁目81番地

調査期間 平成2年5月14日

## 1. 調查概要

本調査は大阪防衛施設局による防火水槽兼プール建設に伴う遺構確認調査である。調査地の西端に3m四方の調査区を設置した。重機と人力を併用して地表下2.3mまで掘削した。この結果、地表下1.0~1.6m、TP9.8~10.4mで黒色土器等を含む淡灰色砂層を、地表下1.8m~2.3m、TP9.1m~9.6mで弥生土器、サヌカイト製石器剥片を含む黒灰色粘土層を確認した。出土遺物は遺物袋1袋程度である。なお、淡灰色砂層には縄文晩期の土器片が1点混入していた。

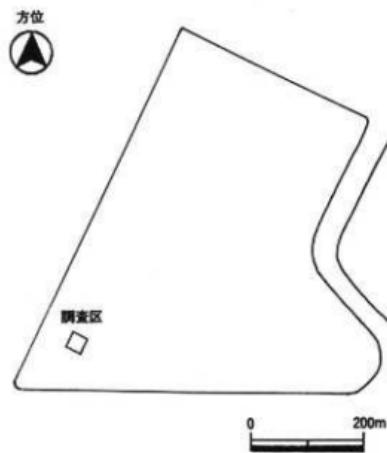
## 2. まとめ

本調査地では平安時代と弥生時代と思われる包含層をそれぞれ確認した。当調査地周辺では、弥生時代から古墳時代にいたる遺構、包含層が確認されており、本調査はその拡がりを確認する資料となった。(吉田)

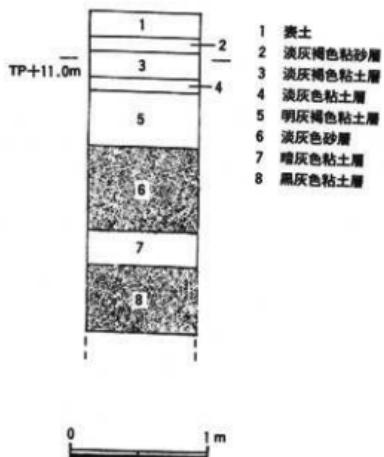
(青田)



第1圖 圖案地圖認圖 (1/13000)



第2図 調査区設定図 (1/1000)



第3図 土層断面柱状図 (1/40)

## 2. 郡川遺跡（90-105）の調査

調査地 大字黒谷474番地1

調査期間 平成2年5月25日

### 1. 調査概要

今回の調査は、重頭池の南西部分にピロティ方式による平家建地区集会所建築に伴い実施した遺構確認の調査である。

郡川遺跡は弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、調査地周辺には弥生土器、須恵器、土師器等が散布しており、集落遺構なども確認されている。

調査は、工事の為に既に水が抜かれた池の中央南より部分に2m×2mのグリッドを設定して、人力により約0.8m掘削を行なった。地表下約0.2mの灰色粗砂と、その下の地表下約0.42mの暗灰色砂疊層からは土師器片が出土した。また、地表下約0.63mの黒灰色礫混土では須恵器・土師器が出土し、他に植物遺体なども含まれていた。しかし、湧き水が激しいうえに礫の堆積が多くて遺構は検出できなかった。



第4図 調査地周辺図 (1/13000)

## 2. 出土遺物

本調査で採集した遺物は、出土した遺物よりも地表面から採集した遺物が多かった。遺物は須恵器、土師器、瓦質土器などである。1は高杯の脚部で内面にしづり目がみられる。6は土師器の羽釜である。7は瓦質のすり鉢で外面は部分的にハケ目を施し、内面には8条／2.5cmのスリ目を施している。2～5は須恵器である。また、今回は図化していないが漆器柄なども出土している。遺物の時期幅は広くおよそ6世紀～12世紀と思われる。

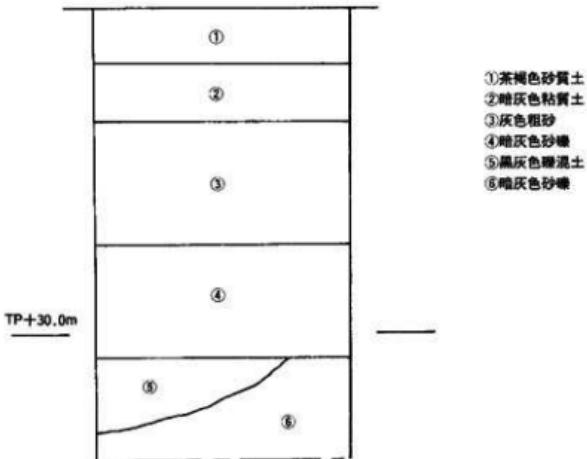
## 3. まとめ

重頭池は、昭和63年度に東側が、平成元年度には西側が改修工事に伴って調査が行われている。今回の調査では池のほぼ中央部分を調査したわけだが、これまでの調査結果とほぼ同時期の遺物が出土した。また、地表面にも多数の土器片がみられることから調査地には古墳時代の集落が残がっていたといえるだろう。

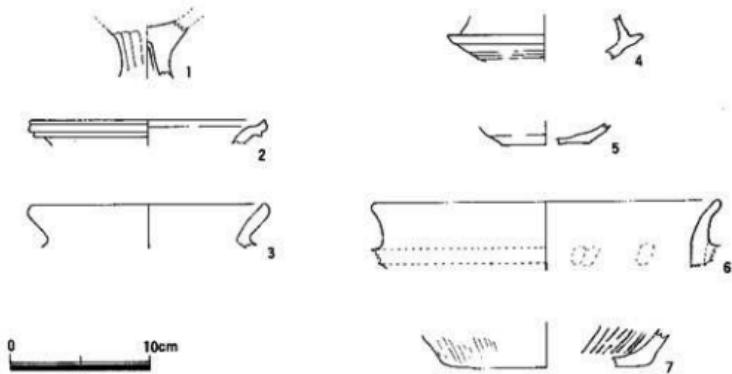
(消)



第5図 調査区設定図 (1/150)



第6図 基土層序模式図 (1/20)



第7図 出土遺物実測図 (1/4)

### 3. 福万寺遺跡・池島遺跡周辺（90-39）の遺構確認調査

調査地 上尾町9丁目1番地

調査期間 平成2年8月6日～9月6日

#### 1. 調査概要

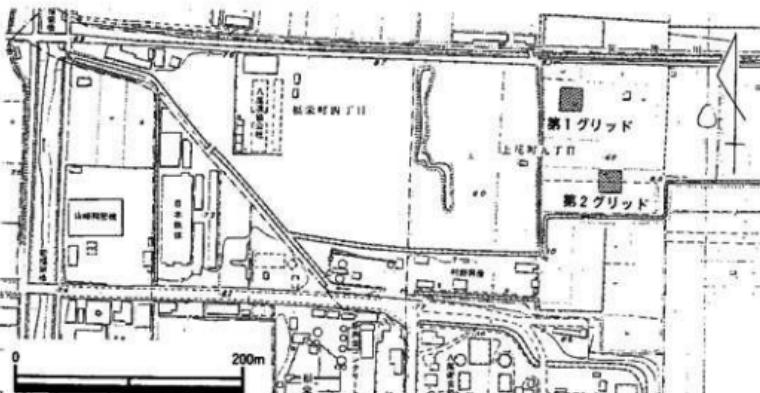
本調査は、八尾市清掃事業所のゴミ埋め立て処分地掘削工事に伴って実施した遺構確認調査である。調査対象地は、北を箕後川に南を楽音寺川に挟まれ、また西側近くに恩智川が流れている湿地である。周辺には、八尾市福万寺遺跡、東大阪市池島遺跡があり、条里制地割が遺存している。更に、古墳時代の玉作遺構、弥生時代の水田跡が発見されている。また、調査地南側の大竹西遺跡内の大阪市清掃工場建設地において平成2年度より八尾市文化財調査研究会によって調査が行われており、徐々に古代からの環境が復元されている。

調査は、 $15 \times 15\text{m}$ のグリッドを敷地内に2箇所設定し、各々地表下約3mまで重機によって掘削した後、以下約3mを人力によって掘削を行い遺構・遺物の状況を確認した。

両グリッド共に、約GL-2mまで盛土が覆っていたが、それ以下では北グリッドにおいて島畠遺構・流路などが確認され、約GL-3.6mでは中世に対応する水田相当層が検出された



第8図 調査地周辺図 (1/13000)



第9図 調査区設定図 (1/5000)

が、明確な畦畔は見られなかった。また、約GL-4mでは、グリッド外へ伸びているため大きさが確認できなかつたが方形の土坑状落込みと不定型の土坑状落込みをそれぞれ一箇所で検出している。遺物は、不定型の土坑状落込みから土師器の小片が3点見つかっている。時期は不明である。しかし、約GL-4.5mでは奈良～平安時代にかけての水田推定面が検出され、畦畔状造構を確認した。遺物は洪水により水田面を覆っていた砂層中から須恵器片3点・土師器片2点が、畦畔状造構よりわずかながら土師器の小片数点が見つかっている。これ以下の層では、約GL-5.7mで径約10cmの小ピットが見つかっているが遺物はみられない。その検出面で布留式と思われる土師器の小片が3点出土しているのみで、以下約GL-7mまで造構及び遺物は確認できなかつた。

南グリッドは、坪境にある場所に設定した為約GL-3.6mまで流路・鍛溝がみられる。約GL-4.3mでは水田相当層が見つかっているが、遺物はほとんど見られないため、時期は不明である。更に、約GL-4.5mでも水田相当層を検出している。遺物はやはり見られなかつたが、北グリッドの層位との相対関係から奈良～平安時代と推定される。この水田相当面の下層から長さ約15cmの斎串が1点出土している。また、約GL-4.7mでは、段丘状の造構があり約50×50cmの方形状の掘り込み4基、約1×1mの方形状の掘り込み2基を検出しているが、遺物は見られなかつた。

## 2. 出土遺物

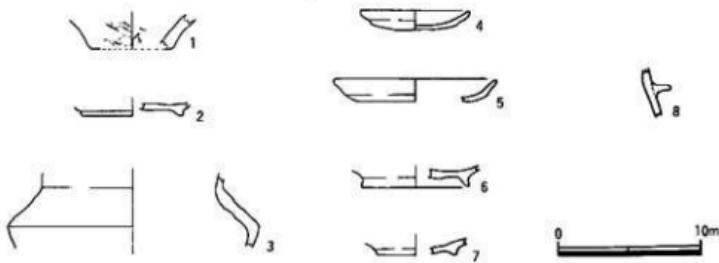
今回の調査では、遺物はあまり出土しなかつた。特に南グリッドではほとんどみられなかつた。それ故に、図化したものはすべて北グリッドで出土したものである。これ等の大半は小片であり、磨耗も著しい。1の壺底部も表面の磨耗が激しいが、わずかにタタキ目がみられる。

6は黒色土器A類である。

### 3.まとめ

今回の調査は、前述の池島条里の近くであるところからいくつかの生産に関する遺構を確認することができた。しかし、集落に関する遺構を検出することができなかつたため、それを耕作していた人々がどのような生活をしていたのかを想像することはできない。それは出土遺物が少なかったことにも起因している。ここから考えられることは、この調査地は当初にも記したように、3つの川に挟まれた湿地であり、生活に適していなかつたのであろう。だが、近接の大竹西遺跡では集落に関する遺構が見つかっており、それとの関連性をふまえて調査区一帯を捉えなくてはならない。以上のように本調査では、福万寺遺跡からの包含層の抜がりは確認できなかつた。層位関係については、池島・大竹西遺跡の今後の調査を常に注目していかなければならないと思われる。

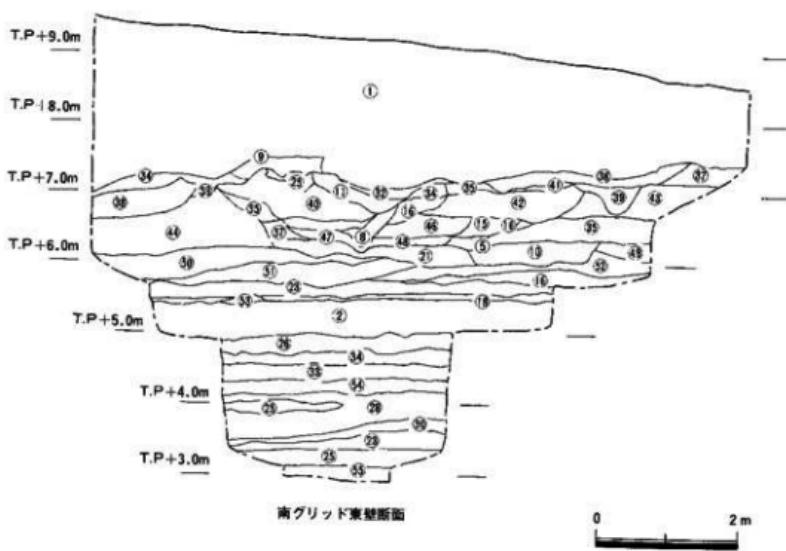
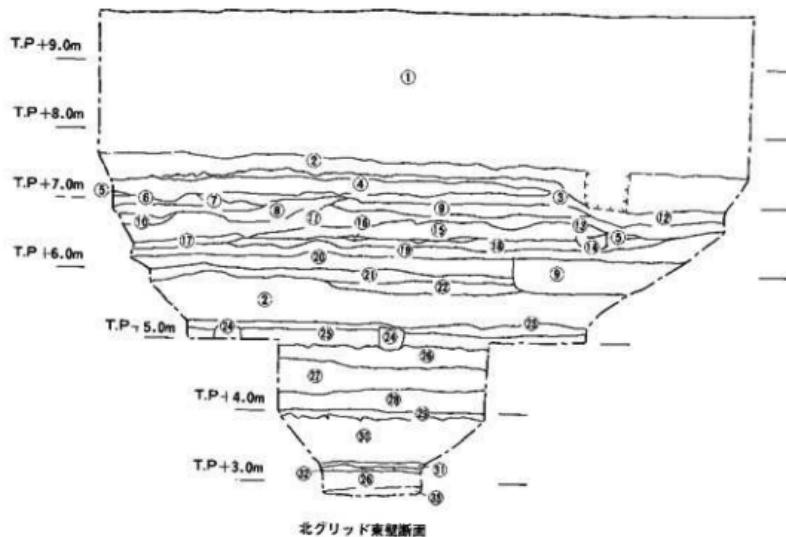
(道)



第10図 北グリッド出土遺物実測図（1／4）

### 土層断面図土色

1. 露上	21. 灰褐色粘質土	41. 黄褐色粗砂
2. 暗青灰色砂泥粘土	22. 灰白色粘質土	42. オリーブ灰褐色砂質土
3. 暗灰色砂質土	23. 灰色細砂	43. 黄褐色粘質土
4. 暗緑灰色砂質土	24. 暗緑灰色礫泥粘質土	44. 茶褐色砂質土
5. 雀色粘砂	25. 灰色微砂	45. 黄褐色砂質土
6. 灰褐色砂質土	26. 暗灰色粘土	46. 暗灰色粘質土
7. 緑灰色砂質土	27. 暗青灰色粘土	47. 茶褐色礫泥粘質土
8. 暗灰色粘砂	28. 绿灰色粘土	48. 茶褐色粘質土
9. 灰褐色粗砂	29. 暗灰色微砂	49. 棕灰色粘質土
10. 暗灰色砂礫	30. 灰色粘土	50. 暗灰色礫泥粘質土
11. 灰色砂質土	31. 灰色砂混粘土	51. 暗灰色礫泥粘質土
12. 青灰色砂質土	32. 灰白色細砂	52. 晴茶褐色粗砂質土
13. 暗緑灰色砂質土	33. 黑灰色粘土	53. 暗灰色粘土
14. 緑灰色微砂	34. 绿灰色砂質土	54. 绿灰色粘質シルト
15. 福色砂質土	35. 福色砂質土	55. 淡緑灰色微砂
16. 灰色粗砂	36. 灰色砂質土	
17. オリーブ灰褐色砂礫	37. 明茶褐色砂質土	
18. 黄褐色シルト	38. 暗灰色粘砂	
19. 淡褐色粘質土	39. 黄褐色砂礫	
20. 灰色粘質土	40. 明茶褐色砂質土	



第11回 土層断面図 (1/80)

#### 4. 恩智遺跡（90-10）の調査

調査地 恩智北町4-650

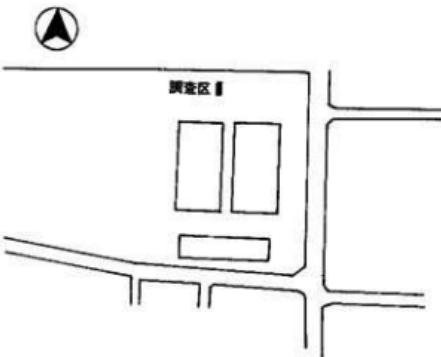
調査期間 平成2年8月23日

##### 1. 調査概要

本調査は南高安小学校内のプール建設に伴う遺構確認調査である。建設予定地の東端に東西2m、南北5mのトレチを設定した。地表下0.8mまで重機で掘削し、以下を人力掘削したところ、地表下0.8mから1.2mのところで遺物を多く含む淡灰褐色粘砂層のA層及び砂を多く含む同B層を確認した。更にこの層の下のTP8.0m前後で淡灰色粘砂層を確認し、この上面で5~10cm程度の石を入れた炉状の遺構を検出した。この遺構の直上からは瓦器、須恵器の他に炭片が出土している。また石の一部には赤く焼けた痕跡がある。遺物はコンテナ一箱分出土した。茶灰褐色粘砂層からは土師器、須恵器、瓦器などとともに北宋錢の至和元宝（2. 1054年初鑄）が出土した。淡灰褐色粘砂A層からは土師器、須恵器、瓦器などとともに輸入陶磁の白磁1点（3）、サヌカイト製石器剝片1点（1）、鉄釘2点が出土した。3は高台と底外面が露胎であり、見込み部分には青味をおびた灰白色の施釉を行なう。淡灰褐色粘砂B層からは土師器、須恵器、瓦器とともに同安窯系の青磁碗片1点（図版9）が出土した。これは体部下半

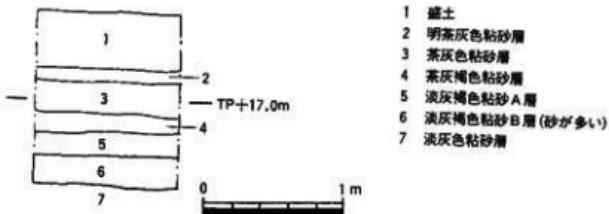


第12図 調査地周辺図 (1/13000)

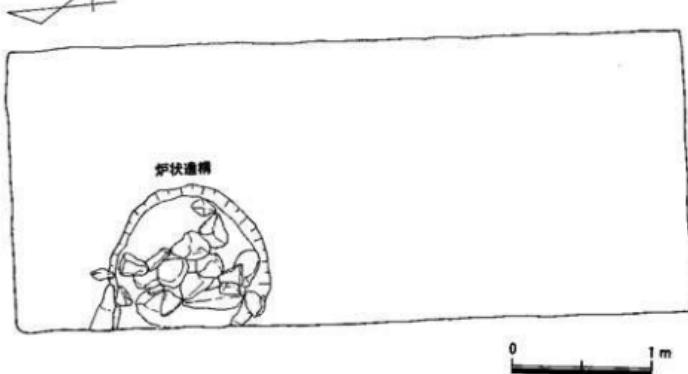


第13図 調査区設定図 (1/2200)

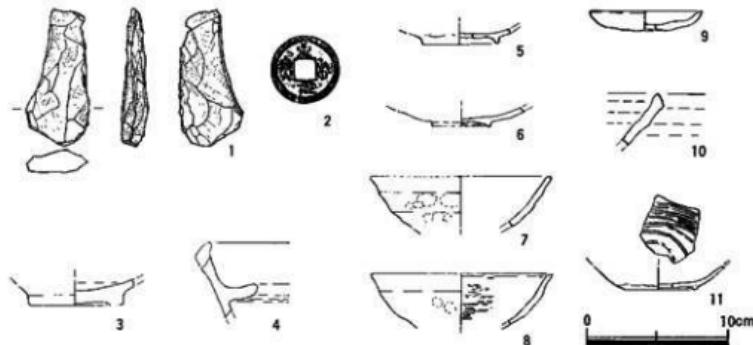
外面が露胎であり、淡緑色の施釉を行なう。外面には櫛状工具による直線文様を、内面にはヘラによる片彫り文と櫛状工具によるジグザグ文様を入れる。4は土師器の羽釜片である。5～8は瓦器椀である。8は内面に断続的に暗文を施す。5、6は断面三角形の高台をもつ。9は土師器小皿、10は東播系須恵器鉢である。炉状の遺構の直上及び埋土からは須恵器、土師器、瓦器が出土している。11は瓦器椀で内面に断



第14図 土層断面柱状図 (1/40)



第15図 調査区平面図 (1/40)



第16図 出土遺物実測図 (1/4)

統的な圓錐状暗文を施し、断面三角形の高台をもつ。本調査の遺構、包含層は13世紀前後に位置付け得る。

## 2.まとめ

本調査地では鎌倉時代の生活跡の一部を確認した。ここから約500m北には13世紀後半に寂尊によって復興された教興寺跡があり、これとの関連を考える資料のひとつとなろう。(古田)

## 5. 萱振遺跡（90-287）の調査

調査地 幸町3丁目83

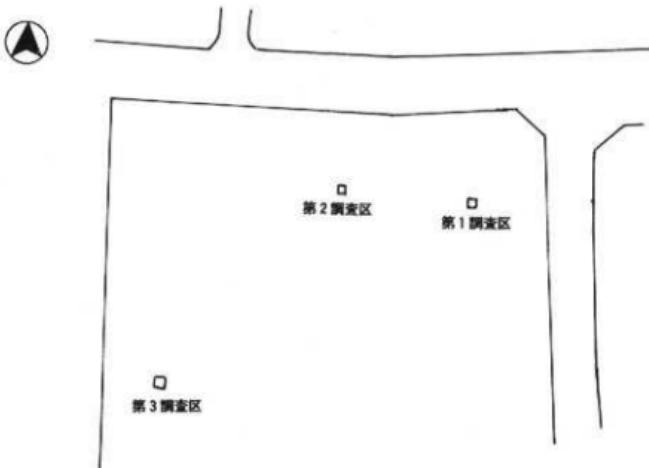
調査期間 平成2年8月29日

### 1. 調査概要

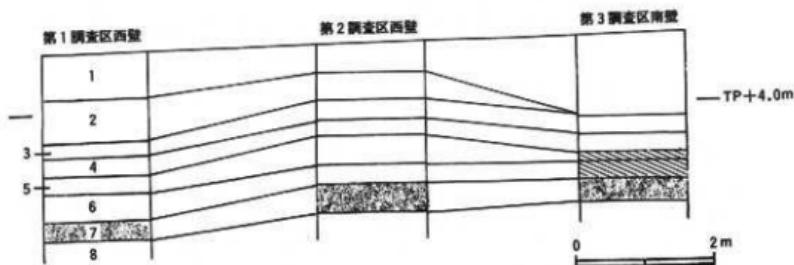
本調査は萱振改良住宅新設にともなう遺構確認調査である。建物建設予定地の東側に2m四方の第1調査区を、西側に1.8m×1.6mの第2調査区を、浄化槽設置部分に2m四方の第3調査区を設置した。第1調査区では地表下1.6mまで重機掘削を行なったところ、暗茶灰色粘砂層が表れたため、以下を人力掘削した。この結果、この層の下の地表下1.9m、TP3.4m前後で淡黒灰色粘土層から弥生式土器小片が出土した。第2調査区では地表下1.3mまで重機掘削したのち人力を併用して地表下2.2mまで掘削したところ地表下1.6m、TP3.4m前後で第1調査区で確認したと同様の淡黒灰色粘土層を確認した。第3調査区では地表下1.2mまで人力掘削を行なったところ、土器片を含む淡暗灰色粘土A層を確認したため、以下人力掘削を行なった。この結果、地表下1.3m～1.6mに土師器、須恵器、瓦器の小片を含む淡暗灰色粘砂層A層及びB層が堆積することを確認した。また、本調査区でもこの層の下の地表下1.6m～



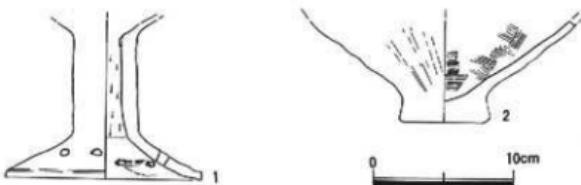
第17図 調査地周辺図 (1/13000)



第18図 調査区設定図



第19図 土層断面柱状図 (1/80)



第20図 出土遺物実測図(1/4)

1.85m、TP 3.7m 前後で弥生時代後期の土器を含む淡黒灰色粘土層を確認した。出土土器は全部でコンテナ半箱程度であった。第1調査区の淡黒灰色粘土層からは弥生後期の甕小片が、第2調査区でも同じ層から弥生土器小片若干が出土した。第3調査区では淡暗灰色粘土層、暗茶灰色粘砂層から古墳時代の須恵器壺蓋片、奈良時代の須恵器壺、蓋片、土師器等が出土した。この他、淡黒灰色粘土層からは弥生時代後期に属する高壺を転用した器台(1)、壺の底部(2)等が倒れた状態で出土した。この器台は高壺の脚内部から壺部に充填した粘土塊を焼成後に脚内部から棒状のもので突き出して貫通させ器台としたものである。色調は暗乳灰色を呈し、角閃石を多く含む。壺は暗黒灰色も呈し、チャート、角閃石等を多く含む。

## 2.まとめ

本調査地では弥生時代から中世にいたる良好な包含層を確認した。特に弥生時代後期の包含層は調査地全体に拡がっているようである。なかでも、調査地南西側の第3調査区では弥生時代後期の土器がまとまって出土しており近接地に当期の集落等の存在することが予想される。

(吉田)

## 6. 久宝寺遺跡（90-11）の調査

調査地 久宝寺2-2-23

調査期間 平成2年11月15日

### 1. 調査概要

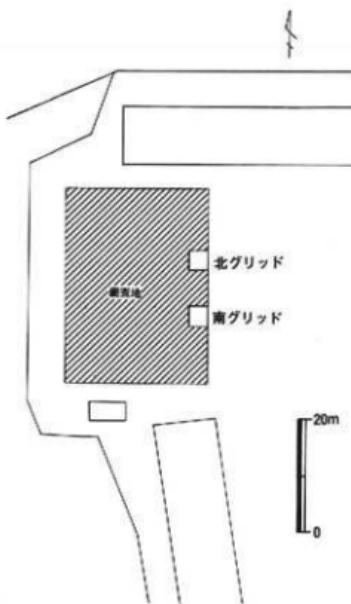
久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川によってできた沖積地に位置し、南北1.5kmにおよぶ広範囲な遺跡である。また、本遺跡は縄文時代～中世にかけての複合遺跡であるが、寺内町としても知られている。

今回の調査は、久宝寺小学校の屋内運動場建築に伴い遺構・遺物の有無を確認するために実施されたものである。調査は、事業計画地に3m×3mのグリッドを南側および北側部分に2箇所設定し、重機と人力を併用して掘削・精査を行い、平面および断面観察を実施した。

第1グリッドでは、地表下約2.2mまで掘削したところ古式土師器を包蔵する暗灰色砂混粘土層を確認した。この砂混粘土層上面から0.2m掘り下げたところで庄内甕が押し潰された状態で2個体出土した。1つは倒れた状態で、もう1つは逆様の状態であった。遺物包含層は約0.25mの厚さで堆積している。遺構は検出できなかった。この下の暗緑灰色微砂および灰白色



第21図 調査地周辺図 (1/13000)



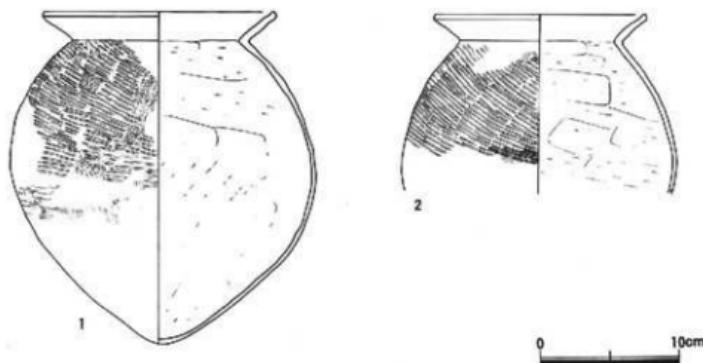
第22図 調査区設定図 (1/1000)

粘土からは遺物はみられなかった。

第2グリットにおいても、地表下約2.4mにある暗灰色砂混粘土層より土師器が出土しているが、第1グリットと比較すると量が少ない。地表下約2.6mでは炭化物を多く含む炉状遺構を確認した。この炉状遺構はグリットの壁際で検出したもので、全体像はつかめなかつたが、橢円形を呈していると思われる。

## 2. 出土遺物

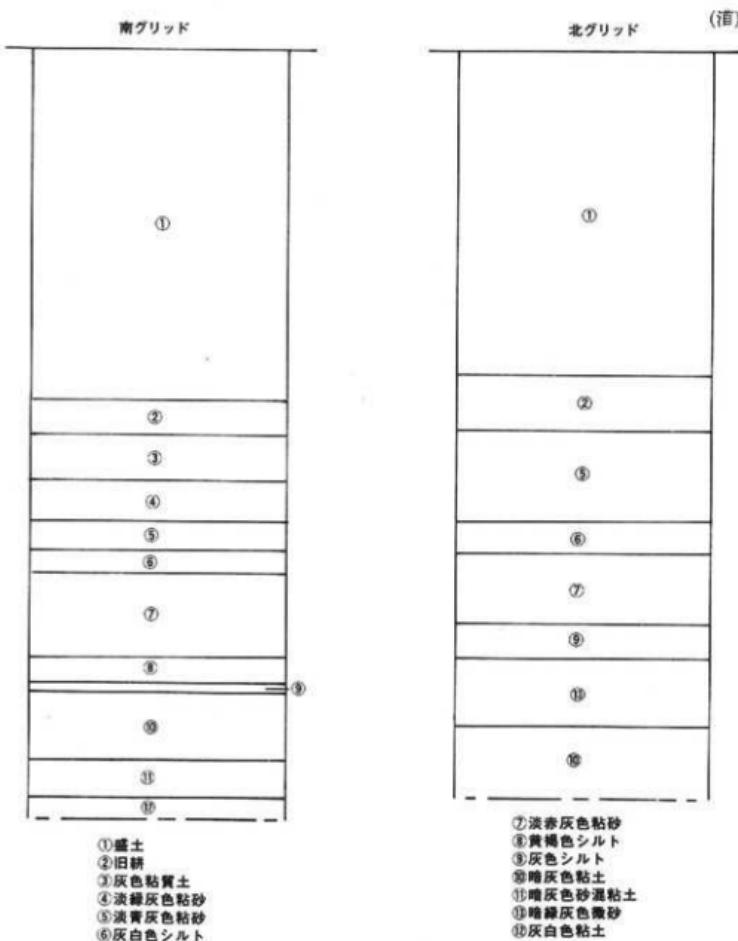
遺物は土師器ばかりであったが細片も多く、今回図化したものは南グリットで押し潰された状態で出土した庄内壺である。中河内では、タタキ目の主軸が右上がりが多くみられるが、今回出土したものは2つとも左上りのタタキ目を施している。1は口径16.4cmで、5~6条/1cmのタタキ目を施しており、部分的にハケナデを行っている。胴下半部ではハケナデを主に施している。2は口径14.7cmで、5条/1cmのタタキ目を施しており、胴下半部にはハケナデを行っている。



第23図 南グリット出土遺物実測図 (1/4)

### 3.まとめ

今回の調査では多くの古式土師器が出土した。特に、調査地の南側では潰れた状態ではあったが庄内甕が2個体制で出土している。また、北側でも遺物の量こそ少なかったが土師器片がみられ、炭化物を多く含む炉状の遺構も検出していることから、付近には他に遺構が存在し



第24図 基本層序模式図 (1/20)

## 7. 矢作遺跡(90-302)の調査

調査地 高美町6丁目111番地

調査期間 平成2年11月21日、22日

### 1. 調査概要

本調査は、八尾市下水道部の第21工区下水道工事に伴って行われた立会調査である。調査は発進立坑部分約40m<sup>2</sup>を対象として実施したものである。調査地がある矢作遺跡は成法寺遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡に囲まれている弥生時代～中世に至る複合遺跡である。

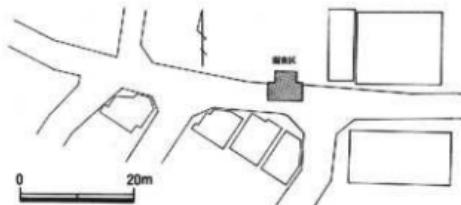
我々が調査に赴いた時点では、既に地表下1.9mまで掘削が済んでいたが、以下、重機による掘削の立会調査を行なった。地表下約2.2mに灰白色砂礫があり、灰褐色粘土、暗青灰色砂礫と続いている。これらは自然流路によってできた堆積であり、東南から北西に向けて流れていたと思われる。自然流路の中心となる灰白色砂礫の最も堆積の厚いところでは約1.2mにもおよぶ、この流路の堆積層中から、須恵器、土師器などの遺物が確認できた。また、流路の下層部分を形成する暗青灰色砂礫層にも土器が見られた。流路の下の暗灰色微砂層からは遺物を確認することができなかった。



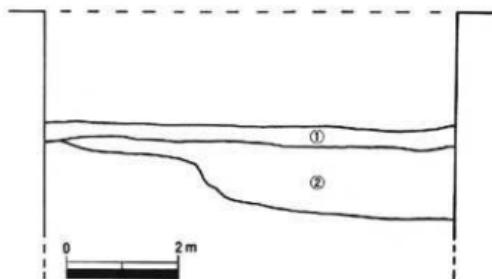
第25図 調査地周辺図 (1/13000)

## 2. 出土遺物

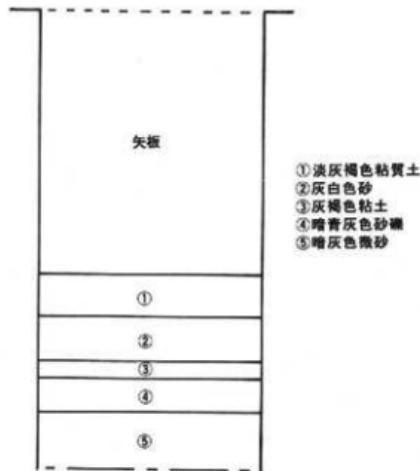
遺物はすべて、自然流路から出土あるいは、上げ土からの採集であったが、土師器が多い。國化したものでは、10点7点が土師器である。4の壺は残存で、口径15.6cm、器高5.7cmを計り、内外面にヘラケズリを施している。5の壺は口径8.6cm、器高3.8cmを計り、内面上部にハケナデを施している。8は小片であるうえに磨耗が著しいが須恵器と思われる。これらの土器は、古墳～奈良時代にかけての遺物であろう。



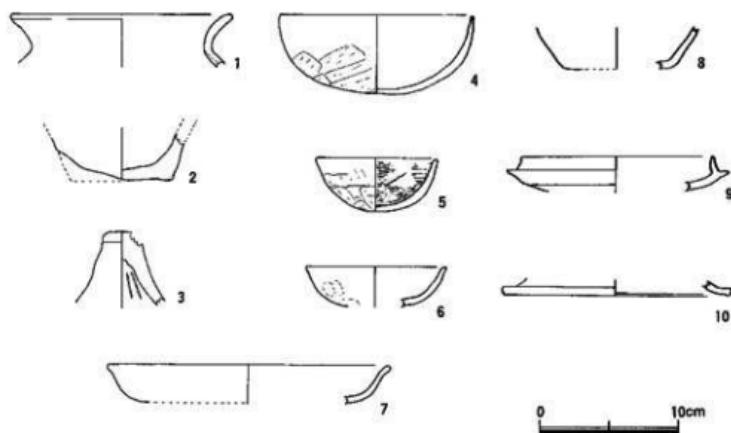
第26図 調査区位置図 (1/200)



第27図 流路断面図 (1/10)



第28図 基本層序模式図 (1/40)



第29図 出土遺物実測図 (1/4)

### 3.まとめ

今回は立会調査ではあったが、自然流路を確認することができ、また流路から土師器、須恵器等の多くの遺物を採集することができた。流路周辺で遺構は検出されておらず、また遺物の磨耗も激しいことから、調査地近辺から廃棄されたものではないかも知れない。しかし、矢作遺跡に隣接し、流路の上流に位置する中田遺跡、東弓削では古墳—奈良時代の遺構が多く確認されており、それらの遺跡と流路と関係を捉えなければならないだろう。

(注)

## 8. 矢作遺跡(90-72)の調査

調査期 安中町8丁目15~12

調査期間 平成2年11月28日

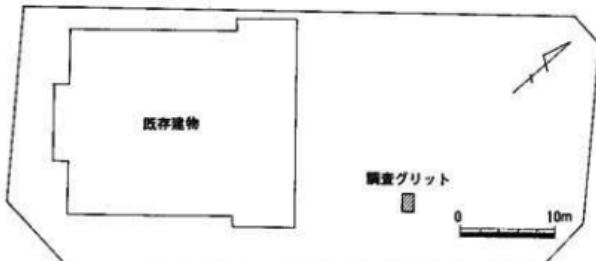
### 1. 調査概要

矢作遺跡は、弥生時代から中世に至る複合遺跡であり、旧大和川主流の長瀬川と玉串川の間の沖積地に位置している。当該調査地は、自然河川の堆積によってできた自然堤防の上に成り立っている八尾街道に面している。

今回の調査は、老人福祉センターの鉄筋コンクリート平屋建て増築に伴うものである。調査は、1m×2mのグリッドを設定し、機械と人力を併用して地表下2.0mまで掘削を行ない、平面および断面の観察をした。現状GLより0.8mまでの盛土を除去した後には、明茶褐色粘砂、明褐色粗砂がみられる。明褐色粗砂層は、地表下約1.15mに存しており、約0.4mの厚さで堆積している。これは、流路あるいは旧大和川による洪水層と思われる。明褐色粗砂層の下には暗紫灰色粘質土、暗青灰色砂泥粘土と続いている。遺物は、暗青灰色砂泥粘土層から出土しており、中世の包含層と思われる。ここからは、土器だけでなく動物の歯もみられた。包



第30図 調査地周辺図 (1/13000)



第31図 調査区設定図 (1/600)

含層の厚さは約0.25mにおよんでいる。包含層の下は褐色粗砂が続いているが、遺物はみられなかった。

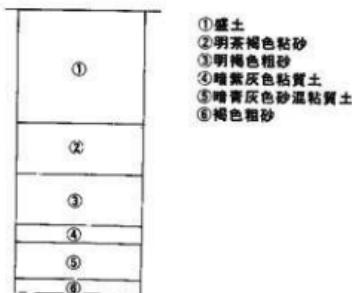
## 2. 出土遺物

瓦器椀、瓦質すり鉢、瓦質の羽釜、瓦などが出土した。

## 3.まとめ

当該調査地は、当初にも記したように八尾街道に面しており、付近は宿と関連があったとする説もある。今回の調査ではそれを直接示す資料は見つからなかったが、中世の遺物が多数出土しており、中世においては安定した生活面を形成していたことがわかった。それ故に、今後の調査では中世の遺構が検出される可能性が高いと思われる。

(道)



第32図 基本層序模式図 (1/40)

## 9. 矢作遺跡(90-201)の調査

調査地 高美町4丁目17-141番地

調査期間 No. 2立孔-平成2年11月3日

No. 3立孔-平成2年11月9日

### 1. 調査概要

本調査は公共下水道立孔掘削に伴う遺確認調査である。市道の南側のNo.2立孔と北側交差点のNo.3立孔との2回に分けて行なった。

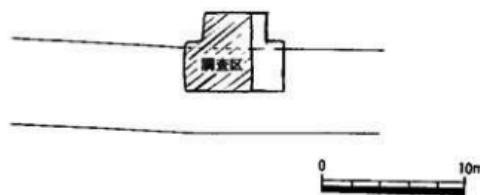
#### <No.2立孔の調査>

立孔掘削工法の関係から立孔の北部分の東西5m、南北6mの範囲を重機で地表下2.0mまで掘削し、更にこれより下は1m四方の範囲を地表下3.6mまで重機で掘削して断面観察を行なった。

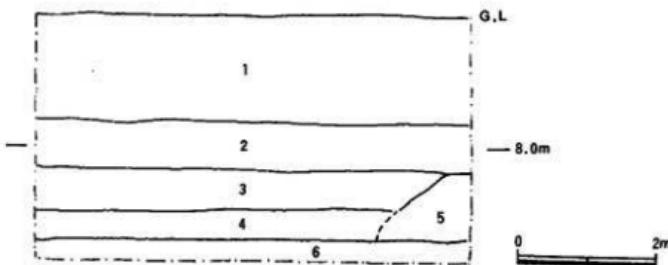
この結果、地表下2.3mのところで暗灰色粘土層上面からきりこむ灰白色砂層を確認した。この砂層のなかから庄内式土器の壺片2点を確認した。これは自然流路の一部を確認したものと



第33図 調査地周辺図 (1/13000)

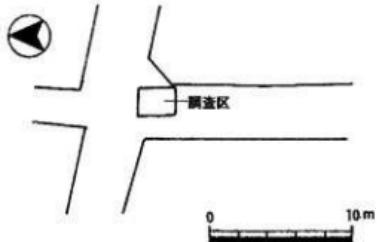


第34図 調査区設定図 (1/400)

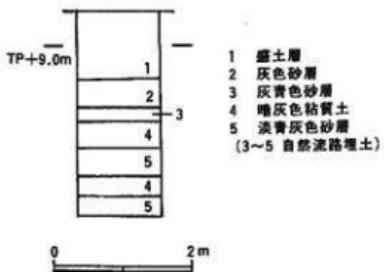


- 1 盛土層
- 2 灰色粘土層
- 3 灰色白砂層
- 4 灰灰色粘土と灰白色砂の互層 } (自然流路埋土)
- 5 灰灰色粘土
- 6 灰灰色粘土層

第35図 北豊土層断面図 (1/80)



第36図 調査区設定図（1／40）



第37圖 土層斷面柱狀圖 (1/80)

思われる。なお、自然流路の底になる土は緑灰色粘土層である。

### <No.3 立孔の調査>

市道北側の交差点部分での立孔掘削に伴う調査である。2m×2.5mの範囲を地表下1.6mまで重機で掘削したところ、灰青色砂層の下の暗灰色粘土層上面付近のTP8.5m前後の位置で須恵器、土師器の小片を確認した。更にこの下を重機と人力を併用して地表下3.0mまで掘削したが、暗灰色粘土層と淡青灰色砂層の互層堆積を確認したのみであった。これは自然流路の埋土と思われる。

## 2. 緒とめ

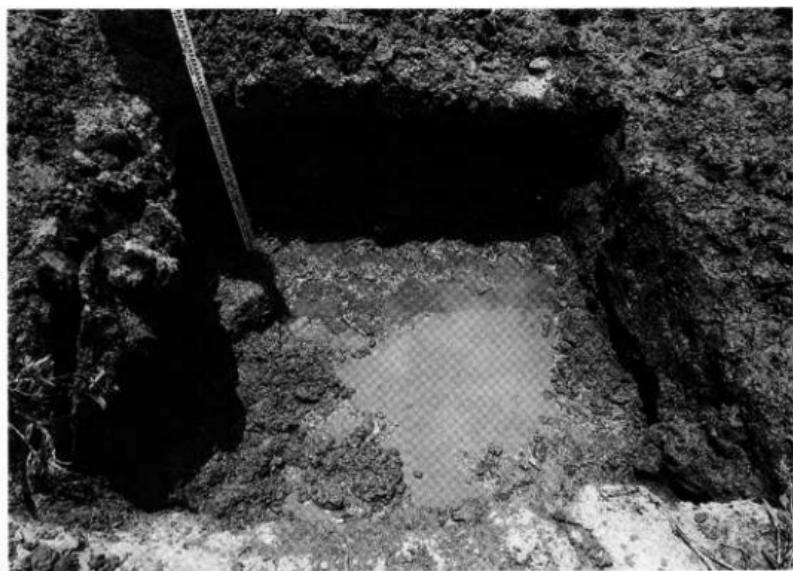
当調査地の北と東の近接地では、これまでの調査で弥生時代から中世にいたる良好な遺構、包含層の他、自然流路も確認されている。No 2立孔、No 3立孔で確認した自然流路の時期を確定することはできないが、これまでの調査の結果と密接な関連をもつものとして注目される。(吉田)

《青田》

図版1 田井中遺跡(90-29)・郡川遺跡(90-105)



90-29 調査区全景(北から)



90-105 調査区全景



第1グリット



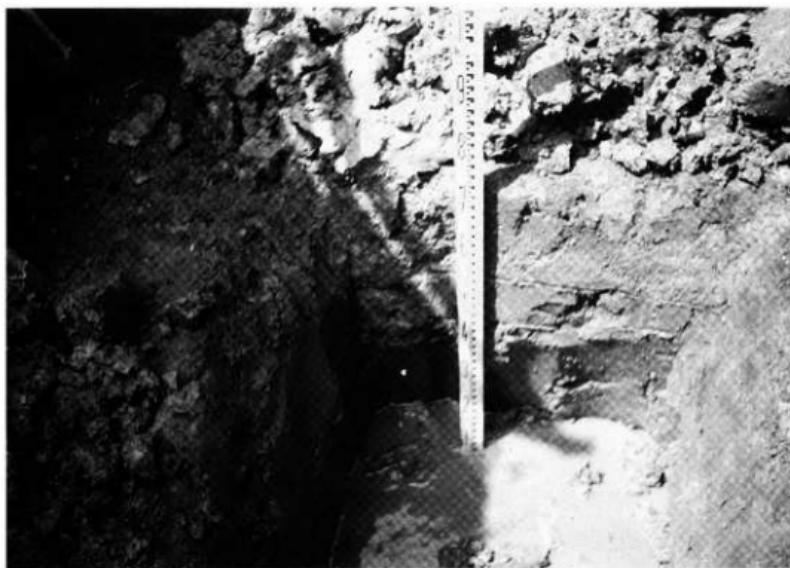
第2グリット



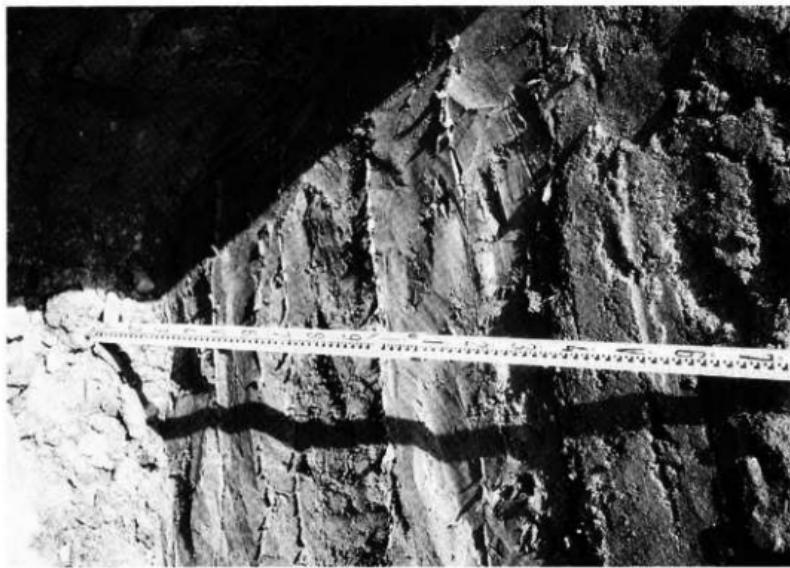
爐狀遺構掘削前



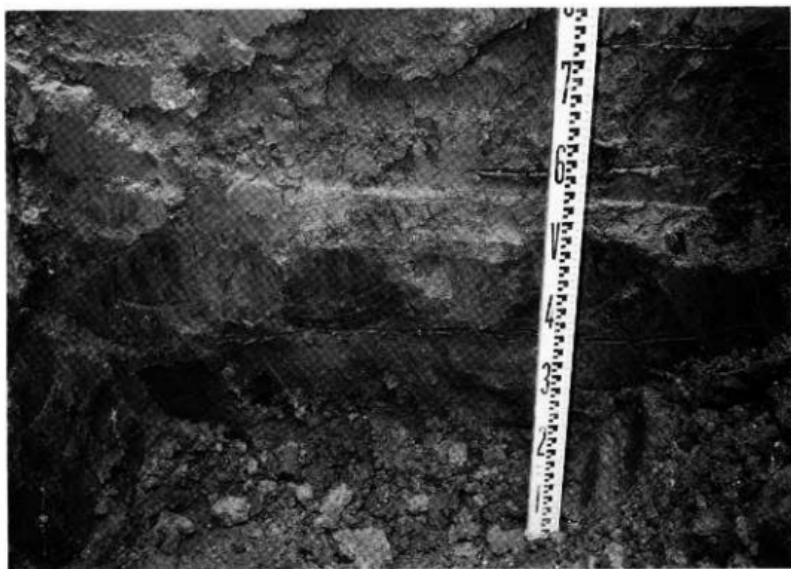
爐狀遺構掘削後



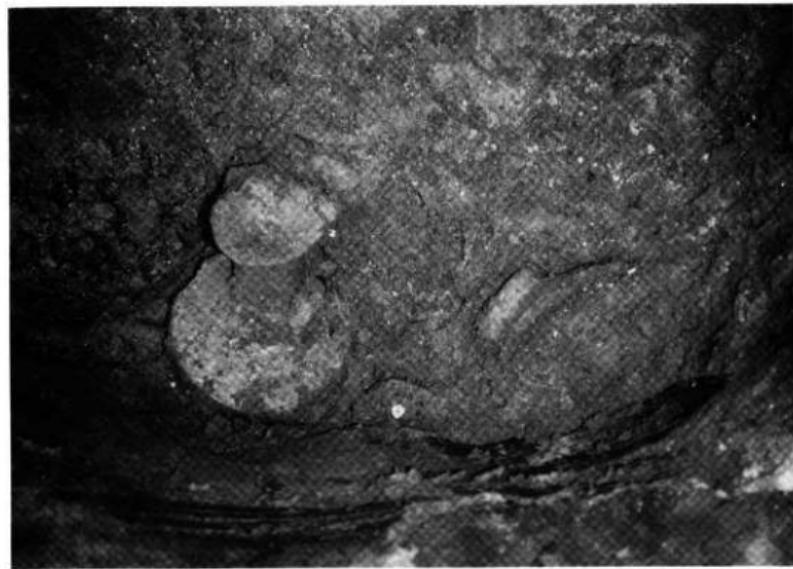
第1調査区西壁



第2調査区西壁



第3調査区南壁



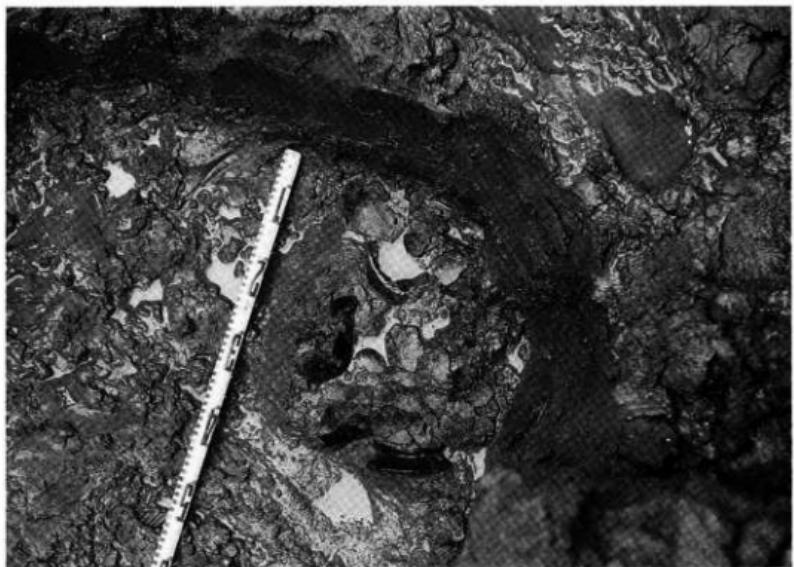
第3調査区 土器出土状況



南グリット



北グリット



土器出土状況



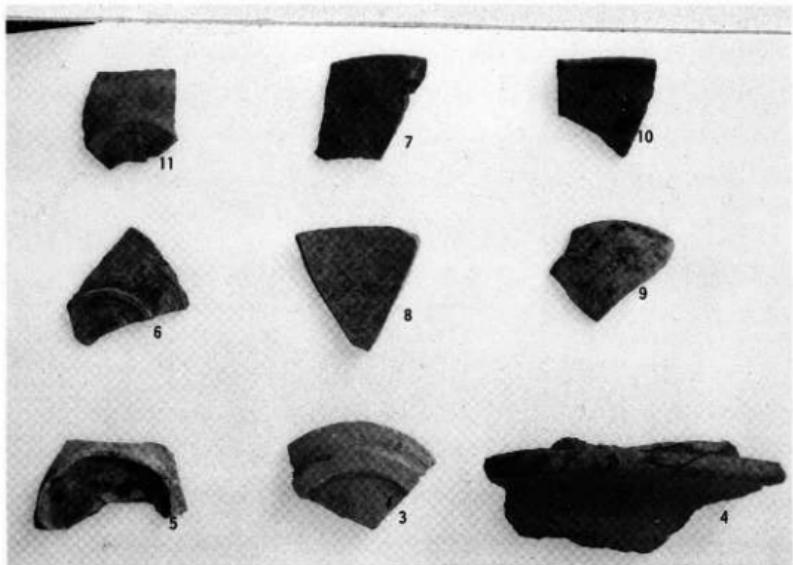
土器出土状況



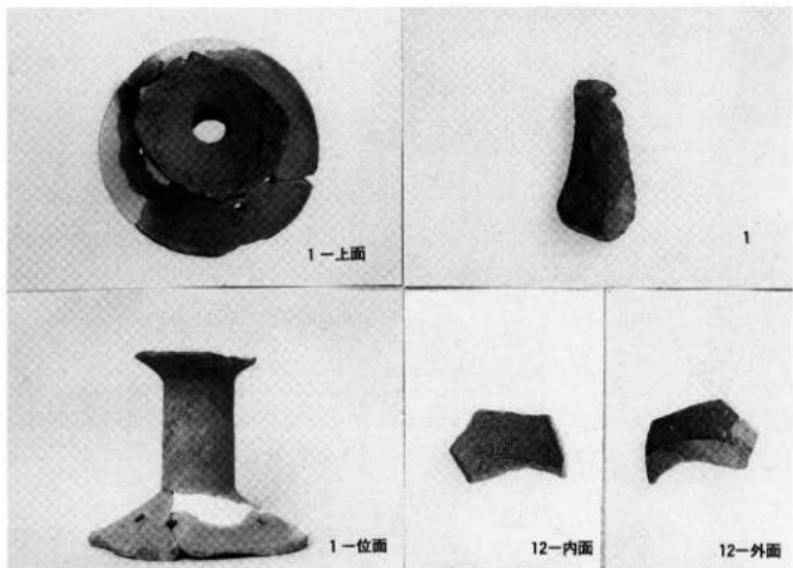
90-72 調査区全景



90-201 NO. 3 立孔

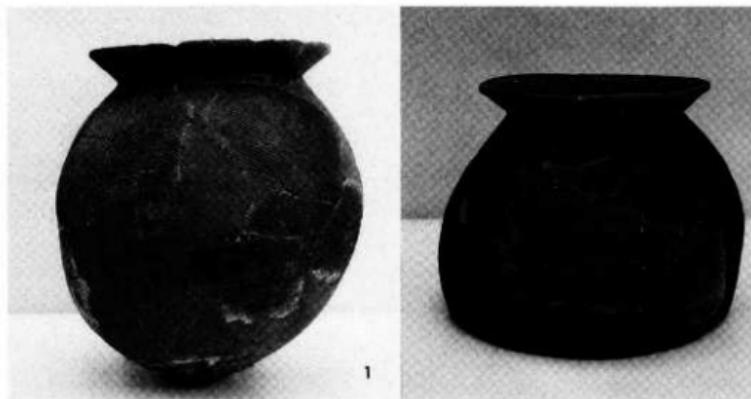


90-10

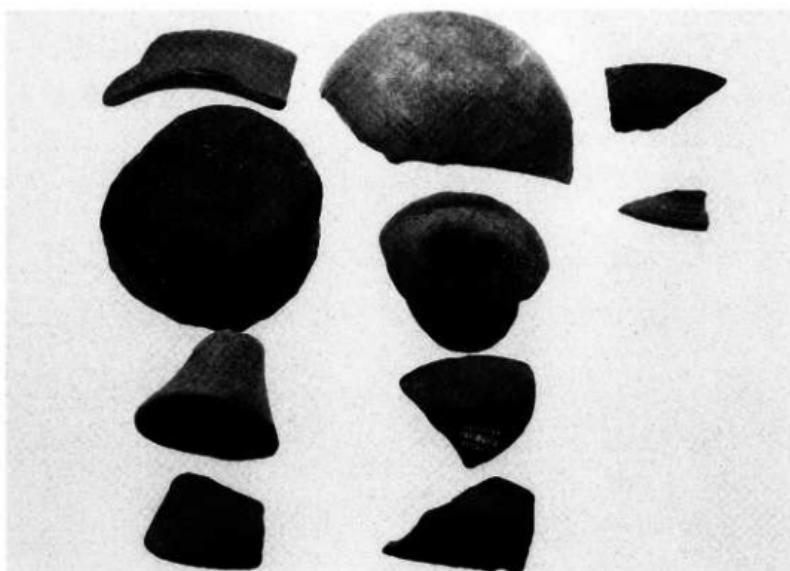


90-287, 90-10

久寶寺遺跡(90-11)・矢作遺跡(90-  
302)



90-11



90-302

八尾市文化財調査報告23  
平成2年度国庫補助事業

**八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅱ**

発行日 1991年3月  
発行所 八尾市教育委員会  
印刷

